

ハート・オブ・ゴールド



通信

vol.10

2003年12月25日発行

発行/編集 ハート・オブ・ゴールド事務局
本部 〒701-1213 岡山市西辛川872-2
T&F 086-284-9700
メール: hearts05@hofg.org

URL : <http://www.hofg.org/>



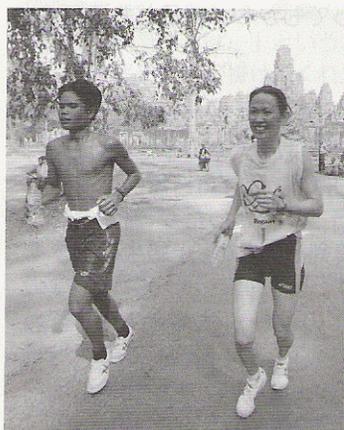
アンコールワット国際ハーフマラソン2003

カンボジアに根づく—— スポーツを通じ友好の輪

11月29日～12月2日、「第8回アンコールワット国際ハーフマラソン」「指導者・青少年スポーツ祭」などのイベントが行われた。カンボジア対人地雷被災者の救済と地雷廃絶をめざし8年目、今年には日本・カンボジア外交関係樹立50周年の節目の年にあたり、一層盛大に催された。

マラソンでは、世界遺産アンコールワットの周回コースを19カ国1500人のランナーがかけぬけ、ま

たスポーツ祭には、バレーボール・バスケットボール・サッカー・バドミントン・テニス・柔道・空手などに1600人が、ウォーキングには、現地の40人の日本語教室の子どもなど200人が参加した。日本からのボランティアも100人をこえた。さらに、インターネット生中継でカンボジアから岡山市芳明小学校の授業に“参加”し、日本とカンボジアの子どもたちの架け橋となる試みが行われる等、多彩な催しとなった。



はじめて参加した少年と走る有森代表



友人サッカーとの出会い



青少年スポーツ祭 サッカー教室



日本語教室の生徒と楽しくウォーキング

会員の皆様へ

ハート・オブ・ゴールド代表

有森 裕子

カンボジアにおいて、2003年11月29日から12月2日にかけて、第8回アンコールワット国際ハーフマラソン、ウォーキング、指導者育成・青少年スポーツ祭、とすべての行事を滞りなく終わることが出来ました。

これらは今年、日本・カンボディア外交関係樹立50周年記念、2003日本・ASEAN交流年記念事業として、在カンボジア日本大使館、JICAとのネットワークの下に活動いたしました。参加いただいた16大学からの43名の大学生、専門家・一般参加の70名以上のボランティアの方がた、そして協賛・協力企業の方々と、参加されたランナー等、多くの人のネットワークで活動が出来ましたこと、心から嬉しくそして感謝の気持ちでいっぱいです。この大会が、日本・カンボディアだけでなく、20の参加国の人にとっても、お互い尊敬と信頼に満ちた深い関係となり、今後の交流発展の場となることを願っています。

来年が、皆様にとって、また世界中の人々にとって、安心して暮し、希望をもてる年となりますようお祈りしております。

篠原臨時代理大使スピーチ

＜青少年スポーツ祭＞

ソー・ケーン副首相殿

ミアス・サルン・カンボジア・オリンピック委員会事務局長殿

有森裕子 ハート・オブ・ゴールド代表そして協力者の皆様

国内外からご参列のご来賓の皆様

生徒の皆さん

こんにちは

本日、この盛大な式に参列できて大変名誉に思います。

ここにいらっしゃる皆さんはもうご存知だと思いますが、国にとってその国民はもっとも大切な価値あるものです。私たちは心と身体が健康であれば何かをすることが出来ます。皆さんの暮らしが健康で喜びに満ちたものであってこそ、国も発展していけるものだと思います。ですから、スポーツや体育について心がけることが大切です。

日本とカンボジアの外交関係樹立50周年、そして日本アセアン交流年を記念し、教育・青少年・スポーツ省、オリンピック委員会、そしてハート・オブ・ゴールドは、カンボジアの将来の人材育成を支援するために、カンボジアと日本の多くの団体と協力して今回の事業を準備されました。日本では毎年学校で運動会を行い、みんなで力を合わせ、健やかにスポーツを楽しみます。今日は生徒の皆さん一人一人が日本の文化である運動会に参加し、日本からいらしゃった方々と一緒になって力を合わせて身体を動かし、楽しんで下さい。

あらためて、常に様々な行事の成功のために協力をしてくださるカンボジア政府に感謝を申し上げたいと思います。最後に、ここにご参列の皆様、そして生徒の皆さん全員が、日本から参加されている指導員やボランティアの皆さんとともに、健康で楽しみながら心と身体を鍛えてくださるよう、祝福いたします。ありがとうございました。



奥浦屋 晴美

<カンボジアを訪れるまで>

私は日本でハート・ペアレントのことを中心にハート・オブ・ゴールドでボランティアスタッフとして働かせてもらっています。とはいっても実際に子ども達に会ったことは一度もありませんでした。

私が学生の間に会っておかなければ、一生会うことが出来なかもしれない。そう思うと、頭の中では彼らに会うことしか考えられなくなりました。こうして、カンボジア行きを決断したのです。

<カンボジアでの生活>

チャイルド・ケア・センターには、お母さん役として現地のスタッフが各センターに1名いて、彼女がご飯など子どもたちの世話を主にしています。何度か一緒に昼食を食べましたが、カンボジアの料理はとてもおいしい！！ごさを広げて地べたに座り、輪になって食べるのがカンボジア式です。

私たちが訪問した際は、カンボジアはちょうど夏休みだったので子ども達はセンターに一日中いましたが、普段はみんな学校に通っています。日本のように年齢と学年が一致しておらず、違う年齢なのに同じ学年の子もいます。しかし、インタビューの時に「学校は好き？」と聞くと、どの子もみんな「大好き！」と答えてくれました。日本のように勉強できる状態が当たり前ではないので、みんな勉強できるということがとてもうれしいようです。

<最後に>

彼らは、現在、里親の方を初めとし多くの人からの愛情を受けています。その愛情を受けているからこそ、彼らはこんなにいい顔で笑えるのだと感じました。みなさまの大きな愛情のもと、子ども達はみんな素直に健やかに育っております。雨季に降る激しいスコールを浴びながら、暖かな気候、豊かな緑、ゆったりとした時間の中で…。彼らの今が、そしてこれからがもっともっと幸せで、愛情溢れるものになって欲しいです。これからどうぞ、長い目で彼らの成長を見守っていただきたいと思ひます。

村上 陽子

皆仲良く暮らしています

お母さん役の寮母さんに暖かく見守られ、子ども達は安心して暮らしている様子でした。子ども達同士は皆仲がよく、大きい子も小さい子も一緒になって遊んでいます。大きい子は料理や掃除を積極的に手伝っています。ゆったりした時間が流れていました。

笑顔で「チュムリアップスオ！」

毎朝、私達がチャイルドケアセンターに到着するやいなや、子ども達がかけよって迎えてくれました。手を合わせて、「チュムリアップスオ！」とどの子どもも声をかけてくれました。こんにちはという意味で丁寧なあいさつです。会ったばかりにも関わらず、子ども達はすぐに打ち解けてくれました。皆ひとつく、とってもかわいい子ども達です。



伝統舞踊アプサラ大好き！

伝統舞踊であるアプサラを披露してくれました。素敵な衣装で登場…本当に皆上手です！！小さい子も、大きい子に負けじと、しっかり踊っています。それもそのはず、ほぼ毎日習いにいっているそうです。稽古場にも見学に行ってきましたが、普段遊んでいる表情とは違って、皆真剣そのもの。上級生の動きを良く見て、一生懸命に真似ています。とても厳しそうなお練習なのに、アプサラは好き？と聞くと、どの子も、「大好き！」と答えてくれました。

折り紙にお絵かきにトランプに…

私達は主に、センターでは子ども達と交流をして時間を過ごしました。折り紙をしたり、お絵かきをしたり、トランプなど、教えながら一緒に遊びました。女の子には折り紙が大人気で、一旦作り出すと、夢中になって次から次へと作りたがっていました。男の子は、一旦絵を書きだすと時間を忘れてひたすら熱心に書き出します。絵の具ははじめて使うようで恐る恐る手にとっては、真剣な表情で打ち込んでいました。皆それぞれ個性的で素敵な絵をかいてくれました。



井戸と簡易水道支援



日本にいるお父さん・お母さん
インタビュー時に一人ひとりに「日本で見守っている人がいるからね」と、伝えました。子ども達は、本当に生き生きとしていましたが、自分の家族と生活できず、さみしい思いはやはりあると思います。そんな中、遠い日本で自分のことを気遣ってくれている人がいるということは、きっと子ども達の支えになっていることと思います。

一人の子どもがこんな風に言っていました。「日本のお父さんお母さん、経済的に援助をしてくれてありがとう、そして、精神的に支えてくれてありがとう。」

●2002年度のマラソン大会の支援活動として、寄付した井戸が出来上がりました

場所：シムリアップ中心から北東40k以上離れたスナルサンクレラム村。

状況：178世帯、人口857人、98%は農業。

村人は村から120m離れたため池に毎日1時間半かけて水汲みに出かけていた。このため池の水は動物なども使っており、衛生的にも問題があった。今回掘った井戸は安全な飲料水を提供し生活状況の改善に大きく役立つものと思われます。

●「いちいの木」(会員、奈良)よりのTシャツ売り上げによる簡易水道支援の報告

場所：スワイ・トム小・中学校(1500名)

状況：5棟の建物に現在手押しポンプの井戸が一つあるだけで、教室の前に簡易水道が引ければ衛生上も非常によくなると思われる。今回ツアーで約50名が訪問し歓迎を受けた。日本人は子ども達の喜ぶ様子を見て、水の大切さが身にしみたようである。

今回、カンボジアスタディーツアーに参加して感じたこと、帰国してから振り返ったことは、あまりにも多すぎて一枚の紙には書ききれないのが現状だ。まだ自分の中でも消化し切れていない部分が多く、複雑に絡み合った状態で帰国して数日を過ごしてきた。これをはっきりした形で自分の外へ出せるようになるには、暫く時間がかかりそうだ。

とはいえ、カンボジアという国で一番心に残ったことは自分にとって明確である。私はこの国で全ての人と会ったわけではないし、一部のひととの交流だけで言い切れるものではないのは重々承知だが、物質的な貧しさの裏の精神的な豊かさを彼らから感じたのだ。私たちが接したのはカンボジアの中でもまだ恵まれている人たちだと思うが、それでも先進国より生活に困難があるのは確実だろう。けれど、彼らの笑顔は日本人が忘れてしまった何かを含んでいるようで、とても素敵だった。こちらが微笑みかければ、必ず返してくれる。笑顔は周りの人を幸せな気持ちにさせる、ということを再確認した。

また今回、言葉を扱う職業に就こうと考えている私にとって考えさせられたのが、言葉の持つ重みだった。これは「現地の言葉と話せば…」というような意味ではなく、井戸見学の際に子供たちが掛けてくれた一言に端を発している。日本語で伝えてくれた「ありがとう」の一言。一生懸命その気持ちを向けてくれた彼らの態度に涙が出そうになった。このとき私は、今まで言葉一言一言をあまりに軽んじて使っていたような気がした。この先、仕事上などでも言葉を述べる際や教えていく際、カンボジアで感じた言葉の重みもまた伝えていきたいと考えている。

さて、この青少年スポーツ大会では個人レベルでの交流が沢山あり、とても有意義だったと思う。というのは、国レベルでどんなに努力をしたとしても、そこから発生するものというのはたかが知れていると考えるからだ。結局それは上辺だけのものになってしまうが、いずれ関係が薄れていきかねない。今回のような個人レベルでの交流であれば、人の輪はどんどん広がっていく上、人づてでその国や国民の本来の姿が伝わっていく。信頼関係が築ければ人の輪は更に強固なものになり、そこへ国や自治体などの力が加わることによって、個人では困難な支援なども可能になるのではないだろうか。そういった理由から、今回カンボジアで作った輪を途切れさせず絆を強めていくのが参加した私たちの使命と考える必要があるように思う。

沢山のひととの交流があったことで、私にとってカンボジアは思い入れの強い土地の1つになった。それだけ関係を終わらせることなく、これからは少し離れた場所にいる、同じ時間を共有した仲間たちのために何が出来るか考え、行動していきたい。今回、このような貴重な体験に巡り合わせてくださった方々に深く感謝している。

2002年3月の千里マラソンの際に開催されたフォーラムでカンボジアの報告をお聞きし、いつかは私も行ってみたいと考えておりました。今年、中2の息子が不登校になり、行くならんと決意し、参加させていただきました。

今回は、皆様のようにカンボジアを支援しようという動機ではなく、息子に地球上にはいろんな人がいて、文化があって、歴史があって、日本にとどまらず、広い視野を持って生きていってほしいという自分勝手な思いで参加させていただきました。モノがあふれる平和な日本の生活との違いをぜひ、感じ取ってほしいと考えておりました。無事、帰国した、今、具体的にどうこうは語りませんが、カンボジアに接したことは貴重な経験だったと思います。みやげ物を懸命に売る幼い子どもたち、1ドル下さいと言う赤ちゃんを抱いた子ども、ショッキングな光景でありました。でも、交流できた子どもたちの何でも吸収しようという素直さや、明るさには私の方が元気をもらった感じがしました。一時の支援ではなく、教育の必要性や、就労支援が重要だと感じ、ハート・オブ・ゴールドの活動は意義深いものと実感いたしました。

それとは別に、今回、参加された多くの方から、「元気」「大二郎」と声をかけていただき、親切に接していただいたことが、息子たちも私も何よりも嬉しかったことです。元気はスポーツ大会の道具搬入や会場設営にがんばったことで、みんなに認められて働けたので顔が輝いていました。大二郎は一流のサッカー選手とプレイできたことが何よりでした。本当にありがとうございました。

最後になりましたが、長い間、準備に携わってこられたスタッフ、ツアーのお世話をして下さったすべての方々に心より感謝申し上げます。(母)

楽しかったです。また、行きたいです。(元気)

簡易水道支援の小学校では僕が水のありがたみを教えてもらい、他にもいろいろなことを学んで、日本では、体験できないことを体験できてよかったです。(大二郎)

トピックス

ハート・オブ・ゴールド
飯田クラブ発足

ハート・オブ・ゴールドの活動を支援しようと長野県飯田市に「ハート・オブ・ゴールド飯田クラブ」が10月10日に設立され、26日に記念総会と講演会が行われた。

設立に尽力された羽場一雄さんをはじめ、代表には飯伊陸上競技協会長の酒井譽さんが就任、当日は有森さんも参加、地元新聞にも大きく取りあげられた。

秋田県雄勝町
健康マラソンに参加
(10.5)

岡山県大学スポーツ国際交流推進機構設立

Organization for International Promotion of Intercollegiate Athletics Okayama

今日、地球的多文化共生時代を迎え、現代社会人に必要不可欠であり、かつ世界共通のルールのもとに行われるスポーツの国際交流における役割は大変重要なものになりつつあります。そこで岡山県内の大学が連携を図り、より積極的なスポーツ交流の実現と、大学でスポーツを志す学生並びに指導者の国際的経験の促進を目的に設立されました。

東日本支部便り

東日本支部リーダー 志澤 公一

8月2日東京で会員交流会を開催しました。今後東日本地区のボランティアネットワーク作りを進めています。グッズ販売など活動できる方お知らせください。

10月4日、5日日比谷公園で開かれた「国際協力フェスティバル2003」(写真左)に参加しました。

8.2 関東交流会



西日本支部便り

西日本支部リーダー 武藤 勝行

昨年、一昨年に引き続いて、今年も車椅子をアンコール小児病院に送ることができました。以下の協力団体とネットワークでこの活動を続けていきたいと思っています。

協力団体：川村義肢株式会社(車椅子提供)

<http://www.p-supply.co.jp/>

バリアフリー教育ネットワーク(車椅子メンテナンス)大阪教育大付属天王寺中・高等学校・生徒会ボランティア部

<http://www.bfe.gr.jp/>

